

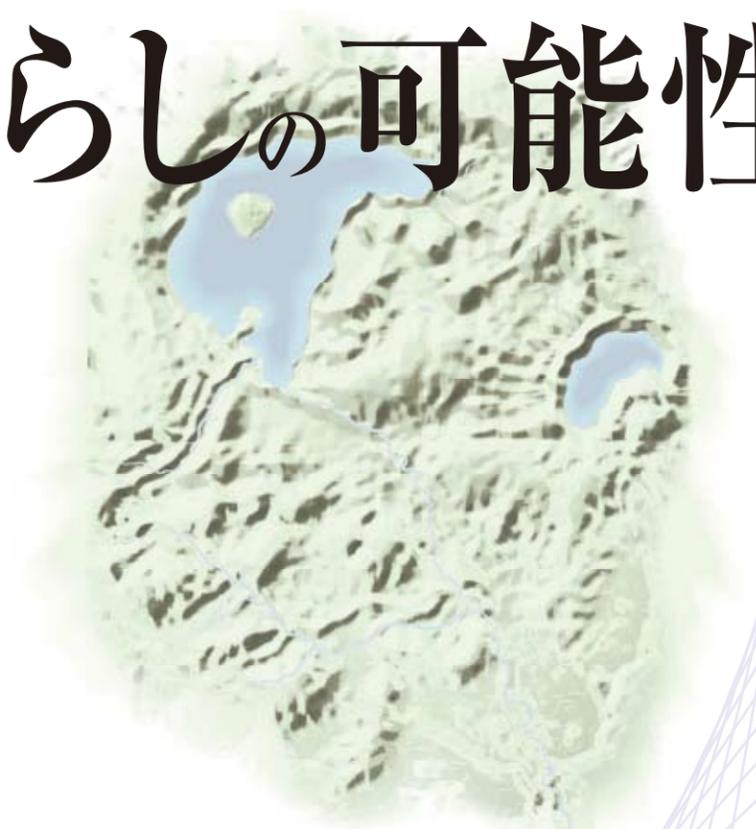


高速インターネット環境がもたらす 田舎暮らしの可能性



社 会基盤と訳されることが多いインフラ (infrastructure) に通信基盤が加わって久しい。通信・電話に始まった通信インフラは携帯電話、インターネットに移行してもまだ進化を続けている。

携帯電話の中継基地はまるで酪農地帯のランドマークのように鉄塔が建ち、作業中のトラクターから世界へとつながる。インターネットにしてもそのサービスは飛躍的に向上、通信速度を表す単位はキロ (K) からメガ (M) に変化した。といってもこれは一般論であって、人



口密度の高い都市部でインフラの整備もたやすい地域での事情だ。本町の市街地から遠く自然豊かな地域には、たとえ利用者のニーズがあったとしても通信基盤を整備するだけの「費用対効果」採算性を望めない状況であった。一部、町内中心市街地では都市部同様のサービスが拡充されたが、格差は依然として残った。

しかし降臨とも言おうか、平成23年7月の地上デジタル放送への完全移行に伴い、同年3月には本町のほぼ全域で高速インターネット網が整備された。

こうした通信インフラの充実、地域産業での活用はもとより、移住促進や企業誘致などにもプラスの効果が期待される。

平成21年に移住した松谷保宣さんの前職は機械のセールス・エンジニアだ。今も以前の会社と契約し、インターネットを利用して自らが設計した生産設備の図面の修正やアドバイスなどを行っている。

「企業では光やブロードバンドは当たり前で、サイズの大きさを考えずに送ってくる。なかには400MB (※) でも普通に通って来る」

そう話す松谷さんは、図面や写真などの大量のデータを受けるため、いまは市街地に住んでいるが、近い将来は自然に囲まれた環境に家を建て、これまで通り仕事を続けたいという。

美留和在住でIT技術者の養成アドバイザーを生業とする水岡祥二さんによれば、ネットワーク環境が整備されるまでに10年のタイムラグがあったそうだ。けれども都市部と遜色のない高速のインターネット環境ができたことによる可能性をこう続ける。



ラフなスタイルでパソコンに向かう松谷さん

建築士や設計者など図面を媒体に仕事を行う職種なら弟子屈でも仕事はできる。「テレビ会議システム」を利用すれば、遠隔地というハンデいは解消されるし、経費も抑えられる。過去にもあったシステムだが、高速ネット環境になったことで「画像が動画となり、フェイス・トゥ・フェイス」のリアル会議が可能になるといえる。

「インターネットは時と場所を選ばない」。一昔前に流行ったキャッチコピーが、緑豊かな弟子屈の森の中でも現実のものになる。

Network

※一般に新聞1ページの情報量が50KB (0.05MB) と言われるから、40ページの朝刊で換算すると0.05MB × 40 = 2MB。つまり400MBとは朝刊200日分の情報量となる。

